

車いすバスケットボール元日本代表主将
パラリンピアン

根木 慎志

PRI・O
トップ対談

大阪府印刷工業組合 理事長

浦久保 康裕

誰もが素敵に輝く共生社会を目指して 東京パラリンピックのレガシーとは？



高校3年生の時、突然の交通事故で脊髄を損傷。以後、車いす生活となった根木慎志氏。知人の勧めで車いすバスケットボールに夢中になり、2000年(36歳)のシドニーパラリンピックでは男子車いすバスケットボール日本代表チームのキャプテンとして出場されました。それ以前から日本全国の小中高生向けの講演活動を実施するなどその功績が認められ、東京2020パラリンピック聖火ランナーや選手村副村長も務められました。1964年以来、2回目のパラリンピック開催を実現した東京。日本がこの経験をどのように活かすのか？共生社会の実現のために自らの経験を通じて今何が足りてなくて何が必要なのか、そして未来に向けてどんな活動を続けていかれるのかをお伺いいたしました。

あすチャレ! プロジェクトディレクターとして

浦久保: パラスポーツが競技活動を通じて、経験してきた夢や目標を持つ価値と重要性について直接話を聞き、肌で感じることができる「あすチャレ!」。そのプロジェクトディレクターとしてこれまでのご経験をとおに「出会った人と友だちになる」ことをライフテーマに根木さんは活躍されています。まずはディレクター就任までの経緯と活動内容、テーマの意味を教えてくださいませんか？

根木: まず「あすチャレ!」ディレクター就任までの経緯からお話したいと思います。ご存じのとおり、パラリンピックの東京開催が決定したのが2013年9月8日の早朝で、2015年6月に日本財団が自国開催のパラリンピックを全面的にサポートするという100億円を拠出する意向を表明し、「日本財団パラリンピックサポートセンター(パラサポ)」を立ち上げました。パラリンピック競技団体の多くは組織が脆弱で、専門の事務所や職員を持た

ない団体もあるので、日本財団ビルの1フロアを共同事務所として29団体に無償提供するなど、組織基盤の強化をサポートする体制が整いました。

パラサポのビジョン「私たちは、スポーツを通じて社会を変えます〜一人ひとりの違いを認め、誰もが活躍できるD&I※社会へ〜」を実現するため1事業として、パラスポーツの教育プログラム「あすチャレ! スクール」を展開していくことになりましたが、ゼロからのスタートでしたので何をどう展開していくのかも確定していませんでした。そんなとき、小中高生を中心に30年以上にわたりパラスポーツの講演活動をしていた私の経験を評価いただき就任に至りました。

「あすチャレ! スクール」は多様性や違いを認めることに主眼を置いて約1,200回実施し、16万人以上の小中高生が体験し

36年間に3,600回以上、延べ80万人への講演 スタートしたころは障がい者の大変さだけを伝えていた

浦久保: 根木さんは36年間で3,600回以上の講演をされてきたと伺いました。どのような思いをもって、どのような内容で語ってこられたのですか？ また3,600回の中で特に印象に残っている講演会や人について教えてくださいませんか？

根木: 私は高校3年生の時に交通事故で脊髄損傷になり、車いす生活をスタートすることになりました。1年半の入院を経て退院できたのが20歳の時で、車いすですぐに走り出すと多くの「バリア」があること

に気づかされました。多くのバリアで困っている私の姿を見ている人たちは、心配そうにはしてくれるんですが、声をかけてくれない。そんな話を中学時代の担任の先生に相談すると、「日本の未来を創る子どもたちの前で、障がいのある当事者の根木君が、障がい者の大変さを直接伝えることで、今後の日本社会を変えることができるかもしれない。講演活動をしたらどうか」と指導いただきました。

講演を開始した当初は、雨の時や坂道・段差に出くわした時など、車いす生活の



パラサポが取り組むD&I社会へのアプローチ(パラサポ公式サイトより)

ました。その他のプログラムとして、障がい当事者を講師にしパラスポーツを題材に共生社会について楽しく学べるワークショップ型授業「あすチャレ! ジュニアアカデミー」は約500回・5万人が受講しました。また障がい者講師のリアルな話を聞き一緒に考えるダイバーシティ研修「あすチャレ! アカデミー」は約500回・約2万人が受講しました。企業・自治体・団体・学校に向けたパラスポーツで行う運動会プログラム「あすチャレ! 運動会」も好評で、約1万人に参加いただきました。このような機会を通じて障がいについての理解促進やパラスポーツの楽しさを、これからもお伝えしていきます。

大変さを子どもたちに伝えていました。「みんなが何気に歩道に自転車を止めているでしょ! そのせいで車いすの僕は通れなくなるんだよ」と話すと、「根木さん、ごめんなさい」って言いながら泣く子どもたちが多くいました。私が話すことで、障がい者の大変さを知って理解し、そのことを意識できるようになることで子どもたちの行動が変わる。この講演の噂を聞いた学校の先生方から大きな反響があり、一気に講演依頼が増えました。

※D&I:ダイバーシティ&インクルージョンの意味で、多様性を認め、受け入れて活かすこと。



車いすバスケットボールとの出会い

根木: あるとき講演活動をしていて、ふと思ったことがありました。「私のことを子どもたちはどのような目で見ているのだろうか？ きっと根木さんって車いすに乗っていて、いつも困っていて大変で、可哀そうな人だと思っているに違いない」。それって、子どもたちに障がいを持つすべての人に対して、「障がい者＝困難な人」という偏った固定概念を植え付けてしまっているんじゃないかと…。

話を脊髄損傷した入院中に戻しますが、知人の勧めで車いすバスケットボールの試合を見る機会がありました。筋骨隆々で車いすに乗りながら素早くコート駆け巡る、イキイキと輝く選手たちの姿を見たとき、素直に人間って凄いな！と体が震えました。自分も同じ人間なんだから、俺にもできると思って退院後すぐに車いすバスケットボールチームの「奈良DEER」に通うようになりました。

嬉しいことに「奈良DEER」の先輩から、競技用の車いすを譲り受けることができました。ある講演会で「この競技用車いす

に乗ってバスケットボールをする姿を子どもたちに見せたい」と思いました。当時、競技用の車いすは一般の人でも見る機会が少なかったため、子どもたちはもちろん初めて見ることになります。素早く縦横無尽にコート駆け回る私の姿を見た子どもたちは「かっこいい！」って言ってくれたんです。普段は泣きの講演会で、シーンとしたなかに子どもたちが泣く声が聞こえてきますが、まったく違う雰囲気になりました。調子に乗ってシュートを決めようとしたのですが、バスケを始めて間もない頃だったのでなかなか決まらず、ゴールに向けて何球もボールを投げ続けました。「頑張れ！ 根木さん」と子どもたちが応援してくれるなか、十数球目でゴールにボールが吸い込まれた瞬間、歓喜の声がドッと起こり、一人の子どもから「根木さんみたいにになりたい！」という声が上がりました。

これまで学校の講演会では、「障がい者＝困難な人・可哀そうな人だから助け合う社会を皆で作っていきましょう」と

伝えていましたが、障がい者スポーツで一生懸命にチャレンジする姿を見せることで多様性を認め合う社会を作っていくことができると確信するようになりました。

講演の休憩時間に子どもたちが寄ってきて、「僕のお父さんも車いすに乗っているんです」と、自慢げに話してくる子どもや、電動車いすに乗った子どもが、「俺のは電動やぞ！」と言わんばかりの自慢げな顔で話しかけてくる。私の話や車いすでのバスケットボール姿を見て子どもたちが自らの心の扉を開いてくれたのです。私の場合は下肢ですが、視覚や聴覚などさまざまな障がいを負い目と捉えて、ひた隠しにして誰にも話さない。そんな暗黙の了解のような日本社会の文化に風穴を開けることができたように感じました。私はこの講演会を通じて、誰もが素敵に輝く社会になれると確信するようになりました。

誰もが素敵に輝く社会形成に向けて

「障がい」は人にあるのではなく、「社会」の中にある

浦久保: 私達はだれも見やすく伝わる情報伝達物作成を目指してメディアにおけるユニバーサルデザイン(MUD)に取り組んでいます。情報の受信のなかにあるバリアを知りバリアを取り除く工夫をする。創意工夫することで誰もが同じように情報にアクセスできる。パラスポーツも同じでルールや用具を工夫することで同じフィールドで競うことができる。このことをいかにお伝えすることができるかが大切だと考えています。

根木: 色覚障がいや視力の弱くなった高齢者、また外国人との言語の壁を払拭する取り組みとして、MUDは今の時代にはなくてはならないものだと思います。そしてこの取り組みがもっと常態化しスタンダードになることが望ましいことだと思います。

講演会の休憩時間に、子どもたちとよくこんな話をします。「皆と一緒に給食を食べたいけど、階段上れないので、皆の教室に行けない。どう解決すればいい？」と。子どもたちは口々に「エレベーター作ればいい」とか「皆で根木さんの車いすを持ち上げて運ぶ」と言ってくれます。このときの障がいは「階段」になります。弱視の人向けに設置されている点字ブロックに荷物が置いてあると、障がいは「荷物」になります。回りくどい言い方になってしまいましたが、誰もが素敵に輝く社会を考えるうえで、もっと社会全体や考え方・価値観を変えていく必要があるように思っています。

浦久保: 今回のパラリンピックは、「共生」「多様性」「心のバリアフリー」がレガシーとして継承するものと言われていません。根木さんが常に発言されている「誰もが素敵に輝く共生社会を目指して」を実現するためにも今回の経験をどのように活かし、継承していくのでしょうか？ そのためにさらに改善、積極的に取り組んでいく必要があることなどはありますか？

根木: 選手村でも競技会場でも、ボランティアの人たちへの評価が非常に高かったことが印象的でした。ホスピタリティのなかにある日本人ならではの思い

東京パラリンピック2020のレガシーを世の中にどのように活かしていくのか

根木: これまでのパラリンピックと比較して変わったと思うのが、NHKが多くのパラ競技を放送していたことではないでしょうか。聞いたことはあるけど見たことがない。ましてや体験なんてした人はもっと少ないパラスポーツですが、今回のパラリンピックで初めてパラスポーツを見た方は多いと思います。SNSや報道で感動や新たな発見など多くのメッセージが寄せられています。このムーブメントをこれで終わりにするのではなく、いかにして継承していくのか、「あすチャレ！」を通じて共生や多様性を体感していける活動を続けていきたいと思っておりますので、ご支援のほどよろしくお願いたします。

やりや繊細さがその評価につながったと思います。ハード面でも競技場のレイアウトも素晴らしく、障がい者でもメインロードを行進することができる配慮が施されていました。新型コロナウイルスの影響で、日本全国にパラリンピアンが出かけることができなかったのが残念でなりません。さまざまな障がいを持つ世界中の人たちが日本中を移動することで、日本各地でさまざまな交流を通じた気づきや生まれ一歩進んだレガシーに繋がると、未来への種まきができただけではないかと思うと、とても残念に思っています。

浦久保: 「障がい」は人にあるのではなく、「社会」の中にある。偏見や知識不足など無知が生むさまざまなバリアをいかにして取り除くのか。情報発信の担い手である私たち印刷産業がMUDで培った経験を活かし、さらに進め社会にあるさまざまなバリア(障壁)を取り除く発信をし、リードする役を担わなければならないと思っています。2025年に大阪で開催されるEXPOはまさに共生社会を実現するための機会です。大阪府印刷工業組合でもこの機会を最大限に活かします。ぜひ根木さんも地元ですのでご協力よろしくお願いたします。本日はありがとうございました。

PROFILE

根木 慎志

奈良県出身。高校3年生の時、突然の交通事故で脊髄を損傷。以後、車いすでの生活となる。知人の勧めで車いすバスケットボールを始め、2000年シドニーパラリンピックでは男子車いすバスケットボール日本代表キャプテンを務める。現役時代から「出会った人と友達になる」というライフテーマをモットーに全国各地の小中高等学校を訪れ、講演やパラスポーツ体験授業を行ってきた。これらの活動が評価され、2016年には、法務大臣表彰(ユニバーサル社会賞)を受賞。現在も東京2020パラリンピックを契機に「誰もが違いを認めて素敵に輝く世界」を目指して精力的に活動中。日本パラリンピアンズ協会副会長も務める。